

迦才の懺悔について

小林尚英

一
まず迦才の基本的な往生觀についてみていくと、

行者無定惠分者唯須專念阿弥陀仏求淨土此為要路也
若自知有定惠分者則於此方修道求無上菩提若自知無定
惠分者則須修淨土行就淨土中求無上菩提(『淨全』六一
六六四頁)

と述べている。これは『大乘起信論』の説示に一致する。こ
こでの迦才の解釈は衆生を定惠の得分によって区別してお
り、定惠の得分ありと知る者は此の界において無上菩提を求
めよとしている。ここでいう定惠について具体的に迦才の
『淨土論』のなかからみていくと、

第一五百年我諸弟子學惠得堅固兼修余行第二五百年學定
得堅固兼修余行(『淨全』六一六六四)

と述べているように、ここでいう定と惠を迦才は定惠といっ
たものと思われる。したがって迦才の場合定惠の分、あるな

しこの界で無上菩提を求める立場と、淨土の行を實踐する立
場の二つがでてくるのである。しかもここで特に注目するこ
とは、前述の如く「行者定惠の分無き者は唯だ須らく専ら阿
弥陀仏を念じて淨土に生まれんと求むべし」といつているよ
うに、淨土行の代表的なものに念仏を挙げていることであ
る。まずこのことを念頭に置きながら論を進めていきたい。

『淨土論』の第八章「明教興時節」(『淨全』六一六六四)
をみると、そこに「謂く今正に是れ懺悔念仏の時なり」と表
題している。さらにそこでは、

第四五年造立塔寺修福懺悔得堅固兼修余行(中略)若
拋此經今是第四五百年余既無定惠之分唯須修福懺悔(『淨
全』六一六六四頁)

と述べている。ここでは今現在には第四の五百年に相当し、自
分は定惠の分なしとし、ただ修福懺悔すべしとしている。さ
らにはまた、

我今此身生在第四五百年中一切聖人隱不現時雖欲修道無

定恵分_二正是懺悔念仏之時_一〔浄全〕六一六六頁

と云つて、ここでも今時は第四の五百年に当たり、定恵の分なく、懺悔念仏を修する時であるとしている。

このようにこれらの解釈によると、迦才は『大集経』月蔵分の五箇の五百年説を引用して、今はまさに仏滅後の第四の五百年に当たり、定恵の分なく、修福懺悔の念仏をする時であるとしている。しかしここで注意することは迦才の場合、定恵の得分なき低下の凡夫に往生を勧める浄土は、娑婆世界に近接する欲界の撰と思われる。

二

そこでしばらく迦才という仏土観をみていくことにする。

迦才は弥陀の浄土について、

若就_二仏論則妙絶_一三界_一若從_二衆生_一具_二二義_一或撰不撰〔浄全〕六一六三頁

と云つて、ここでは三界の撰不を論じており、もし仏に約しているならば超過三界であるけれども、衆生の所見に従うならば撰不撰の二義があるとしている。すなわち不撰については、

明_三不撰_二者若是初地已上菩薩及羅漢辟支無學人_一生者此即不撰由_二

已斷_二正使_一出_三三界_一故也〔浄全〕六一六三頁

と云つて、初地以上の菩薩および二乗、無学人の所生の土は

迦才の懺悔について（小林）

三界の所撰ではないと説いている。これらの人は三界の煩惱を断じ、すでに分段生死を超えているからである。これに對して、

若拋_二凡夫及三果學人_一往生者此即在_三三界撰_一以_二此等衆生未_一出_三三界_一故〔浄全〕六一六三頁

と云つて、凡夫および前三果の学人の生ずる土は三界中欲界の撰としている。これらの衆生は未だ三界の惑を断ぜず、分段生死を免れないとしている。

迦才は、当時の仏教思想の流れのなかにあつて西方浄土を低くおさへざるを得ず、したがつて、そこに往生する凡夫の階位も、当然低く扱つたのである。迦才は通常西方浄土通報化の説を立てたといわれている。その迦才の仏土観は、如来の側については、三身三土の区別なく、救済すべき衆生に従つて、報土、化土を莊嚴するというにあるので、西方浄土通報化の説も一理はある。しかし、二乗凡夫の往生すべき浄土としては、迦才は報土往生を認めず、三界の撰である化土往生を勧めている。すなわち本願を本意とされる凡夫の往生すべき浄土は、意外にも迦才においては最も価値の低い境域であるということになつてくる。迦才は、

問曰已知_二西方具有_三三土_一未_二知_一即今凡夫念仏願_二生得_一何土_一也答

曰依_二如_一撰論_三唯生_一化土_一不見_二法報土_一也〔浄全〕六一六三〇

頁

といつて、凡夫が念仏して願生しても、化土に往生して、法報の土を見ることができないといい、その往生の土は三界の撰であると言っている。このことは、本願の正意が凡夫のためであることを強調せんがためであった。それはかつて撰論教学の流れを汲んだと彼として、通論家の諸師が凡夫の入報を認めず、別時意を唱える間に処して、何としても閉ざされている凡夫救済の門戸を聞かんとして苦闘した結果、已むを得ずでた一種の妥協説であり、折中論ともいえよう。迦才は凡夫に分のない報土に関しては多くを語らず、凡夫が往生すべき化土について詳論している。人を勧めて往生せしめんとする浄土が、何故三界の撰であるかという疑問に対しても、浄土が三界の撰であればこそ、三界の惑を断じない衆生も往生することができるのであって、三界を超出した浄土ならば、凡夫には分のないこととなるから、三界中の煩惱具足の衆生を界外の報土に生ぜしめるわけにはいかないという。そしてついに浄土が三界のなかにあるが故に往生が可能であるという結論に至つものと思われる。

三

そこで次に浄土に生ずるための行業についてみていくことにする。その理由はこの行業のなかに懺悔が取り扱われているからである。その行業の代表的なものに、上根の者のため

に通別二因、中下根の者には要略五因を定めるのである。そこで迦才は通別二因を修することのできない中下根の凡夫の為に「就中下之人要唯有五」(『浄全』六六四二頁)といつて、五種の行業を示している。そこでいう五種とは、懺悔・菩提心・念仏・觀察・廻向の五つをいう。この中下根の凡夫が修する五種は、上根の通別二因のなかで、通因のなから菩提心のみを選びとり、別因よりは念仏・觀察・廻向の三種をとり出し、それに中下根の凡夫なるが故に懺悔を加えたものと思われる。そこでここでいう懺悔を迦才はどのように述べているからである。それは、

一先須懺悔無始已來障道惡業恐淨土作留難也如方等經名經中所說(『浄全』六六四二頁)

と述べている。ここで一つ懺悔等を説く中下根の機根について考えてみたいと思う。周知の如く迦才における上輩・中輩・下輩の機根については、

前之三品並是大乘人其中輩三品多是小乘人也(中略)若論下輩三品惣是一切起惡凡夫(『浄全』六六三六六三七頁)

といつて、大乘の機を上輩、小乗の機を中輩、起惡の凡夫を下輩に配したのである。そこで懺悔等の中下根の機根を考えると、中下根とは宇野禎敏氏によると、九品生中という、上品下生と中品下生と下輩三品を指すものとしている。その理由を探ると、まず上品下生について迦才は、「上品下生者惣

是十信前一切趣善凡夫」〔浄全〕六一六三六頁〕といつており、中品下生については、「中品下生者在ニ小乘五停心觀前一受ニ五戒一已去一切趣善凡夫」〔浄全〕六一六三六〇六三七頁〕といつており、下輩の三生については、「論ニ下輩三品一惣是一切起惡凡夫」〔浄全〕六一六三七頁〕といつている。これによつて理解できることは、上品下生、中品下生、下輩の三生をすべて凡夫としてゐることである。このことによつて懺悔等を説く中下根の機根に充當させたものと思われる。換言すれば中下根の機根はすべて凡夫を対象としてゐることが理解できてくる。

この凡夫について、迦才は、

法藏比丘四十八大願初先為一切凡夫後始兼為ニ三乘聖人一故知淨土宗意本為ニ凡夫兼為聖人一也……〔中略〕……故知淨土興意本為ニ凡夫一非レ為ニ菩薩一也〔浄全〕六一六四三頁〕

といつて、四十八願の説願の次第順序において、凡夫のためにするものは初めに位し、聖者のためにするものは後に置かれており、浄土宗の意は本と凡夫の爲にし、兼ねて聖人の爲にするものだといつている。これは迦才が「浄土宗の意は本と凡夫の爲にし兼ねて聖人の爲にせり」というとき、その真意は地前以上の聖者、菩薩はすでにこの『浄土論』の勧誘には係わりのないものであることを意味している。したがつて、迦才が兼ねて聖人のためといふことは、一転して菩薩聖

者は、このような低級な浄土往生の法門を必要としないといふことに通するのである。故に迦才のいう「本と凡夫の爲にして」といふのは、善導浄土教とは、その発想の原点において基本的には対立すると思われる。

四

そこで次に本論である懺悔について触れていきたい。まず懺悔については、迦才は下輩の三品について明かす箇所において、

若人破戒心生ニ慚愧一依ニ大乘經一懺悔得滅罪相〔浄全〕六一六三七頁〕

と述べてるように、懺悔による滅罪が説かれている。罪惡的存在の中下根の者においては、前述の如く、そこではまず最初に他の行業に先だつて、懺悔は必ずなさねばならないものとしてゐる。またこの文では「一つには先ず須らく無始よりこゝかた已來……」といつてゐることから、中下根者にとっては、懺悔によつて罪相を滅した後、はじめて第二の發菩提心などの往生の行業を修めることができるものと思われる。そうすることによつて、はじめて罪惡的存在の中下根者は、前述の如く上根の者とはほとんど同じ往生行を具足することができるのである。それを具体的に述べてゐる箇所をみていくと、懺悔滅罪した後「専心念仏及作ニ觀行者一並在ニ前二輩中一生不レ

入下輩中「論上也」（『浄全』六一六三七頁）とされていることにより明らかである。ただここで注意することは前述の如く、「大乘経によって懺悔すれば」といって、大乘の經典によって懺悔することが、義務づけられている。それ故に「方等経仏名経の中の所説の如し」といっているように、中下根者の往生因である懺悔は『方等陀羅尼経』と『仏名経』によったことが理解できる。

ただ中下根の罪惡的存在の凡夫が、「不_レ發_レ菩提心_レ慚愧懺悔_一入_レ惡道_レ無_レ有_レ出期_一」（『浄全』六一六六五頁）と述べているように、菩提心を起しても、懺悔がなければ惡道におちるとしている。また、

若人聞_レ說_レ專念_レ阿彌陀仏_レ得_レ生_レ淨土_一即須_レ懺_レ悔惡業_一修_レ習善根_一持戒清淨專念_レ仏名_一一心不_レ亂至_レ百萬遍_一者臨_レ命終時_一正念現前_一即來迎此是即易往若有_レ衆生聞_レ說_レ阿彌陀仏_一仍故造_レ罪雖_レ念_レ仏名_一心緣_レ五欲_一此是雜結使念臨_レ命終時_一心即顛倒_レ仏不_レ來迎_一此是無人也（『浄全』六一六六八頁）

と述べているように、持戒清淨にして、念仏を修しても、懺悔によって滅罪しない限りは、五欲に惑わされた心の状態である造罪の状態、すなわち結使（煩惱）の念を雜える状態を相續する限りは、往生は不可能であるとしている。以上のことにより、この中下根者の五種の往生因は、先ず懺悔をして惡業を滅し、後に善なる功德を積んでいくという形がとられ

ている。換言すれば中下根者の往生因として示された他の四種、すなわち菩提心・念仏・觀察・廻向の基礎となるものが、この懺悔である。

しかしながら、迦才は懺悔をそのみで完全に独立した淨土往生の行業とは考えていないようである。第八の「明_レ教與時節_一」章で、『大集経』の五箇の五百年説を引用し、それは、

若拠_レ此経_一今是第四五百年余既無_レ定惠之分_一唯須_レ修福懺悔_一修福懺悔最_レ為_レ要者觀_レ諸經論_一礼_レ仏念_レ仏觀_レ仏相好_一此最_レ為_レ勝也（『浄全』六一六六四頁）

といて、修福懺悔が最も必要だとしている。道綽の『安楽集』ではただ「懺悔修福応_レ称_レ仏名号_一一時者」（『浄全』一一六七四頁）といて、修福懺悔の具体的な実践行として称名念仏のみしか挙げていない。これに対して迦才の場合、修福懺悔の具体的な往生の行業として「仏を礼し、仏を念じ、仏の相好を觀_レずる」ことであるとしている。さらに『正法念経』を引用した箇所をみても迦才は、

又仏度_レ衆生_一自有_レ四種_一如_レ正法念経説_一一以説_レ法度_レ衆生_一二以_レ光明相好_レ度_レ衆生_一三以_レ神通通力_レ度_レ衆生_一四以_レ名号_レ度_レ衆生_一此四之中相好名号正当_レ今時_一觀_レ察阿彌陀仏相好_一及称_レ仏名号_一也（『浄全』六一六六四頁）

といて、今時においては觀察と称名念仏が必要であると

ている。すなわち『安樂集』では五箇の五百年も四種の度生も、共に『大集經』の文として、この二文を一連に引かれ、四種度生の初めの三種、すなわち法施の度衆生、身業の度衆生、神通力の度衆生はやがて逆次に五箇の五百年の初めの三箇、すなわち第一の五百年、第二の五百年、第三の五百年に配当されたのである。そして道綽はこの『大集經』の二文を引いた後、これを会合して、今時は第四の五百年に当たり、惠学も定学も多聞誦誦も及ぶことなく、仏の三業の化益に洩れたのであるから、懺悔修福して、仏号を称すべきであると決したのである。これに対して迦才は經文を別別に引用し、しかも五箇の五百年では当今は第四の五百年であって、修福懺悔すべきだといいつつも、その修福懺悔の内容は礼仏と念仏と觀相好とが最勝であるといひ、また四種度生では第二と第四とを併せ取って、相好と名号、すなわち觀察と称名とが、正に今時に相当するとしたのである。要するに相好を觀ずる觀察(第二の相好)と称名(第四の名号)を今の時機に應ずる行法と見ているのであって、称名(名号度生)にその基本的立場を置く道綽と立場が異なるものである。これは迦才が『安樂集』を受けつつも、四種度生の解釈に関し、異なった立場を取ることを示したものである。

次に迦才が、「第九教二人欣厭_二勸_三進其心_一」とあるなか、「正是懺悔念仏之時」(『淨全』六一六六頁)といっているこ

迦才の懺悔について(小林)

とや「第八明_二教興時節_一」でも「今正是懺悔念仏時也」と述べている文に注目する必要がある。これは明らかに道綽の『安樂集』の説を受けたものであって、その『安樂集』に、計今時衆生即当_三仏去_二世後第四五百年_一正是懺悔修福_二称_三仏名号_一時者若一念称_三阿弥陀仏_一即能除_三卻八十億劫生死之罪_一一念既爾況修_三常念_一即是恆懺悔人也(『淨全』一六七四頁)と述べていることから、迦才がいう「懺悔念仏」は『安樂集』に影響されたことは、間違いないことである。この立場は後の善導にも表現されてきており、『般舟讚』のなかで、一切善業回生利、不如_三專念_二弥陀号_一、念念称名常懺悔、人能念_三仏_一還憶(『淨全』四一五三八頁)と述べているように、「念々の称名は常の懺悔なり」といっている。以上、懺悔を中心に述べてきたが、この迦才という懺悔は具体的には他の行業との合縁において行われたと思われる。すなわち、中下根で説くような菩提心も觀察も廻向もみな懺悔との合縁であり、換言すれば懺悔を踏まえることが必須条件になっていると思われる。

1 稻岡了順稿「迦才の本為凡夫兼為聖人説について」(『印仏研』二六一)参照。

2 「迦才『淨土論』における懺悔」(『印仏研』三三二)参照。

3 稻岡「前掲論文」参照

ハキーワードD 懺悔、滅罪、『淨土論』

(大正大学講師)